



## 慶應義塾大学ビジネススクール

# セイコーエプソン株式会社

1964年の東京オリンピック開催が会社発展の契機となった企業は数多い。その一つがセイコーエプソン株式会社である。往年の米国の偉大なスプリンター、「ボブ・ヘイズ」、彼が東京オリンピックでマークした記録は手動計時で9秒8、人類の夢であった9秒台を初めて達成するはずであったが、この大会から採用された電子計時では10秒06。諏訪精工舎（現セイコーエプソン）が開発した電子時計が大記録を阻む結果となった。セイコーエプソンはオリンピックに先駆けて、小型水晶時計の研究開発に成功し、「デジタルストップクロック」、「クリスタルクロノメーター」（卓上小型水晶時計）、「プリンティングタイマー」を完成させた。

この100分の一秒まで計測する正確な計時システムは、世界中に日本の技術力を強烈にアピールする結果になった。

「開催地が東京ということで、公式計時の役割を日本が任され、どうせやるのならエレクトロニクスでやろうという大方針が出されました。そのときに時間をコンピュータで処理し、順位も自動的に出てプリントアウトする。そういう機能を持ったプリンティングタイマーを作りました。これがわが社の発展のベースでした」セイコーエプソン草間社長は語る。

装置の開発にあたった当時の中村恒也取締役技術部長（後に社長、相談役を歴任）が、この成果を述べている。

「諏訪で開発された水晶時計の一群が万丈の気を吐いてくれたことは、われわれとして忘れられない大きなことであります。社史に大きな足跡となって、いつまでも輝くことでしょう」

言葉どおり、クリスタルクロノメーターはクォーツウオッチに、プリンティングタイマーはプリンタへと発展した。東京オリンピックで培った技術はエレクトロニクス産業の発展とともに様々に派生し、進化して、現在ではプリンタ、スキャナ、液晶プロジェクタ等映像機器などの情報関連機器、半導体、液晶表示体、水晶デバイス等の電子デバイス部門をあわせて売上構成90%に達する。ウオッチなどの精密機器は全体の7%にも満たない。次々に技術革新が起り、ウオッチを基盤に多くの事業が育った結果である。

長野県諏訪市という湖畔の小さな町で誕生し、しかも大企業になった今日でも、その地に

---

本ケースは、クラス討議のための資料としてまとめられたものであり、経営管理に関する適切あるいは不適切な処理を示すことを意図したものではない。

本ケースは、慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授柳原一夫の指導の下、同研究科M12期修了生大久保隆弘が作成した。作成にあたっては、セイコーエプソン株式会社から関連資料の提供を受けるとともに、代表取締役社長草間三郎氏にインタビューを実施(2001.8)した。